幼稚園より

卒園礼拝
3/4金　13:20〜
お話　シュー土戸ポール
（学院宣教師・大学宗教主任）

終業礼拝
3/14月　9:40〜

卒園式
3/15火　10:00〜

始業礼拝
4/6水　9:40〜

入園式
4/8金　10:30〜

母の日礼拝
5/16月　9:40〜

（教諭　石橋 エリ）

初等部より

初等部ハンドベルコンサート
3/3木　15:40〜16:30
初等部米山記念礼拝堂

卒業礼拝（6年生のみ）
3/7月　9:10〜9:40
初等部米山記念礼拝堂
説教　小澤淳一（宗教主任）

6年生を送る礼拝
3/11金　8:25〜8:50
初等部米山記念礼拝堂
奨励　島根照夫（教諭）

受難週特別祈祷会
4/18月–22金 8:00〜8:15
初等部米山記念礼拝堂

イースター礼拝
4/26火　8:25〜8:50
初等部米山記念礼拝堂

お母さんへの感謝の集い
5/17火　11:00〜12:00
青山学院講堂

（宗教主任　小澤 淳一）

中等部より

卒業礼拝
3/14月　9:00〜9:40
青山学院講堂
講師　笹森建美
（日本基督教団駒場エデン教会牧師）

CF（クリスチャン・フェローシップ）活動
4/7木　校内清掃奉仕活動

春の教職員修養会
4/8金　13:30〜14:30
講師　平塚敬一
（立教女学院中学校・高等学校校長）

イースター礼拝
4/26火　9:20〜10:30
青山学院講堂

母の日・家族への感謝の日礼拝
5/10火　10:20〜12:00
青山学院講堂
講師　左近深恵子
（日本基督教団曙教会牧師）

（宗教主任　西田恵一郎）

イースター礼拝の新しい試み

西田 恵一郎　中等部宗教主任

「長い礼拝」。四月に入学したばかりの新入生にとって、イースター特別礼拝は、正にそのような礼拝だったのでしょう。殊に中学受験を経て入学してきた新入生たちの多くは、生まれて初めて聖書や讃美歌を手にして、礼拝なるものに参加するのです。

毎日の15分の礼拝に少しずつ慣れてきた時、いつもの倍以上の長さの礼拝で、牧師先生の少し難しい話を聞く。お話の内容は、死人が甦ったという普通ではありえないこと。こういう特別礼拝と毎日の礼拝、そして、折々の宗教行事の繰り返しの中で、生徒たちは、大切なものを全存在で受けとめ、体験し、心を成長させてゆくのです。たとえ語られている内容が理解できなくても、眠気に襲われても、反発を感じても、大切なものには感覚的に気付いているのではないでしょうか。

そうであるとはいうものの、キリスト者の信仰の第一の対象であり、その希望の土台であり、かつ、この希望の目標を明示しているイエスの復活を証しする礼拝を「長い礼拝」で済ませたくはありません。その意味をもっと分かり易く伝えたい、そのために出来ることは何かないのか。これが宗教委員の教員に共通する思いであったのでしょう。

話し合いの中で浮かび上がってきたのが、中等部のクリスマス礼拝でした。

今年度で42回を数えるこのクリスマス礼拝は、ページェント形式で行われます。三部構成で、第一部が待降、第二部は降誕、そして第三部のキリストの生涯は切り絵で表現したイエスの受洗から十字架までのシーンがスライドで映し出されます。全体を通して流れているのは、生徒による聖書朗読、聖歌隊の賛美、ハンドベル部の演奏、そして会衆讃美です。最後の十字架のシーンは、復活のイエスをほめたたえる言葉で閉じられています。

話し合いは、この十字架のシーンから、今度はイエスの復活に焦点を絞って、同じようにスライドを使って甦りのイエスを伝えられないかということになりました。

スライド用の切り絵は、学報の切り絵カットの描き手である千輝教頭にお願いしました（千輝先生は2010年3月定年退職）。快く引き受けてくださいました。クリスマス礼拝と同じ十字架から始まり、埋葬・復活・エマオ途上の四場面の切り絵が完成しました。それぞれにふさわしい聖書箇所が選ばれました。

聖書朗読の後には、分かり易い解説を入れることにしました。入学式直後の新入生オリエンテーション・キャンプをはじめ、特別な時間割の中を許されるわずかの時間で朗読者・聖歌隊・ハンドベル部・視聴覚委員の練習を済ませ、2008年4月25日、新しい形でのイエスター礼拝が守られました。

慌ただしい時期に教職員の方々にも生徒たちにも、無理を強いてしまったかもしれません。でも、やはりイースターは大切なのです。

使徒パウロは言っています。「そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります。…しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました。」（Ⅰコリント15:17〜20）。

復活、そして、そこに至るまでの受肉と十字架というキリストの歩みのなかに見られるのは、神が人をかけがえのない存在として愛している（大切にしている）という事実です。この福音の事実を教職員と生徒が協働者として証しできるクリスマス礼拝とイースター礼拝は幸いな時だと言えるでしょう。

新しい形でイースター礼拝が守られた2008年は、中等部のクリスマス礼拝が40回目を迎えた年でした。40という数は、聖書では試練や苦難を表す数であると同時に、新しい時代の始まりを告げる数でもあるとされています。最後にラインホルド・ニーバーのあの有名な言葉に耳を傾けましょう。

「神よ、変えることのできるものについて、それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。変えることのできないものについては、それを受けいれるだけの冷静さを与えたまえ。そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを、識別する知恵を与えたまえ。」

礼拝に使用された切り絵

「十字架」

「埋葬」

「復活」

「エマオ」（ルカ24:13-35）

シリーズ 地の塩、世の光　file 10　◉各界で活躍するクリスチャン

わたしの目にはあなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。

ch.43:4 Isaiah　イザヤ書　第43章 4節

Migiwa
シンガー・ソングライター

すべてが変わった神様との出会い

私が人前で歌い始めてから、早いものでもうすぐ10年になります。

あんなに人前に出るのが苦手だった私が、こんな活動をしていることを未だに不思議に思うことがあります。

私はクリスチャンホームに生まれ、小さい頃から聖書にふれていました。教会は家族のような存在がたくさんいて、大好きな場所でした。でも学校という場所は大嫌いで、毎朝泣きながら通っていました。私は同世代とどう接したら良いのかがわからず、友達ができずに、学校ではいつも一人でいました。そして、授業もほとんど聞けない子供で、成績もいつも悪かったです。自分は他の子とは違うと感じ、なにかコンプレックスを子供ながらに持っていました。中学に入ってから、ますます集団生活についていけなくなり、ついには不登校になりました。

そこから数年、私はひたすらに自分の世界にこもるようになりました。毎日詩や絵を書いたり、ギターを弾いたりする日々を送っていました。でもそれは孤独で空しくて、私は何のために生きているのだろうと問う日々でした。

あるとき聖書のことばに出会いました。

「わたしの目にはあなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」イザヤ書 43:4。

私は衝撃をうけました。こんなどうしようもない、生きていても仕方がないであろう私のことを、こんなに愛してくれている存在がいることを知ったとき、涙がとまらなくなりました。弱くても、小さくても、ありのままの私を、この世界を創った神様が愛してくれている。この神様のために、すべてを捧げて生きていきたい、できれば大好きな音楽を通してこの愛を伝えていきたいと、強く思うようになりました。

あるとき姉の知り合いが、今度ライブで歌ってみない？ と誘ってくださいました。その頃はまだ、人前に出るのが恐怖以外の何物でもなかったのですが、初めて人前で歌ったとき、自分でも驚くほど、ほとんど緊張することなく、そして喜びでいっぱいで賛美をしたのを今でもはっきり覚えています。それは自分にとって、不思議な体験でした。それから少しずつ歌う機会を与えていただくようになりました。その間は、多くの恵みをたくさん受けたと同時に様々な試練にもあいました。

音楽を通して神様を伝えること、それは生半可な気持ちでは決してできない聖職者の働きだと気付いた時、私には到底続けていけないと何度思ったことか。その中でも大きい試練だったのは、一昨年にストレスから喉頭肉芽種という病気で、声が数ヶ月全くでなくなったときでした。コンサートは泣く泣くすべてキャンセルし、一年半活動を休止しました。でもその間、渡米先で賛美や神様のことを多く学び体験する尊い機会を与えられ、活動を再開してからは、もっと喜びに溢れ賛美することを経験しました。私はこの神様によって人生が変わりました。

この愛と恵みに満ちた神様を一人でも多くの人に伝え歌い続けたいです。

The Salt of the Earth, The Light of the World

シリーズ・私の教会　file 58　Church of Christ in Japan -- Yoga Church

日本基督教団 用賀教会

浦上 真理子
幼稚園教諭

閑静な住宅街の中にある日本基督教団用賀教会は、1949年5月1日に橋本ナホ牧師の開拓伝道により小さな用賀伝道所としてスタートしました。一昨年には創立60周年を迎え、現在の4代目の牧師は韓国から来た白正煥（ペクチョンファン）先生で着任8年目となります。

毎週日曜日は9時から教会学校が始まり、乳幼児から小学生が25名ほど集い、保護者の方々も一緒に礼拝を守り、礼拝後には子ども達が年齢ごとに分かれて分級の時を持っています。分級では暗唱聖句カードを作ったり、制作をしたり、また近所の公園に出掛けて遊んだりします。9時20分からはジュニアチャーチが始まり、中高生が20名ほど集って共に礼拝と分級の時を持っています。中高生は定期的にその後の主日礼拝に出席しており、近年はクリスマス礼拝の中でトーンチャイムの奉奏や賛美の奉唱をしています。

中高生をはじめ、教会に集う子ども達は近隣に住んでいることを機に、またミッションスクールに通うことを機に教会生活をしている子どもが多く、子ども達への伝道を教会員皆で大切にしています。10時からは主に大人を対象にキリスト教教会生活入門講座が牧師によって開かれています。

10時半からの主日礼拝には0歳から90歳台までの老若男女が約60人集い、共に神さまの御言葉を福音として聴き、賛美し祈りを捧げています。今年度からは教会員一人ひとりが受け身ではなく能動的に礼拝を献げる群れとなることを願い、特に奉仕する教会生活が送れるよう祈りをもって過ごしています。

礼拝以外の諸集会は、第一主日礼拝後に各会の例会がもたれており、青年会、婦人会、壮年会と年代に分かれて食事などをしながら交わりの時をもちます。他に木曜日の昼と夜に聖書研究会、また、月に一度、讃美歌を歌う会や聖歌隊練習などもあります。年間の行事としては、7月に教会学校の子どもから大人まで、またその家族まで対象を広げての一泊ふれあいキャンプがあります。また1月の終わりの日曜日には、礼拝後お餅つきをしています。幼児は大人に力を貸してもらい、また大人は腰を痛めない程度に思い切って杵を振り下ろす姿も見られます。

このような用賀教会に私が通うようになってから約20年が経とうとしています。初めて礼拝に出席した日曜日、その当時はまだ求道中で教会を探していた私ですが、帰り道には「この教会に通ってみよう!」と心動かされたことを今でも覚えています。やや緊張しながら初めて行った場所であったにも関わらず、ホッとする空気と居心地の良さを感じたのです。その後受洗に導かれるまでには暫く時間が掛かりましたが、今では幾つかの奉仕をさせて頂きながら私にとってなくてはならない存在となっています。

田園都市線用賀駅から徒歩3分というとても便利な所にあります。お近くにお越しの際には是非私たちの教会にいらしてください。

〒158-0096
東京都世田谷区玉川台
2丁目21番8号
電話：03-3707-1538（会堂）
03-3700-2417（牧師館）
Fax：03-3707-4038
ホームページ：
http://blog.yoga-church.net/

CHRISTIAN BOOKS & CDs　シリーズ・キリスト教関連メディア紹介

水口 洋（著）
『陽だまりの窓辺から』
今、学校が子どもたちに与えられるものは
いのちのことば社　フォレストブックス　1999年

木戸 久美子
初等部教諭

陽だまりの午後。高く青く澄み渡った空を見ると、私は中高生活を思い出します。私は、キリスト教主義の中高一貫の女子校に通っていました。中学生の頃、私はひどい反抗期でした。学校では先生の言うことを聞かず、授業中も寝てばかり。今となっては、私が幼かっただけなのですが、なかなか「はい」と言えない生徒だったのです。多くの先生方に、ご迷惑をお掛けしました。たくさん叱られもしましたが、私の話を聞いてくださる先生も、たくさんいらっしゃいました。

そんな私が、今こうして教師をしているということは、やはり学校が私の「居場所」だったからだと思います。学校へ行けば、友達に会える。部活ができる。私のことを認めてくださる先生がいらして、その先生とお話しができる。そんな想いが強く、私は学校から離れることはありませんでした。

高校生の時に、教員になろうと決意し、大学は教育学科へ進学しました。大学での生活は、とても楽しいものでした。しかし大学生活は自分から動かなければ、ただ漠然とした毎日の繰り返しです。教員になりたいけれど、どうしたらいいのだろうか。私は本当に教員になりたいのだろうか…。私自身も、日々の負のスパイラルに嵌まってしまっていました。そんな時、キリスト教学校同盟主催の「キリスト教学校後継者養成プログラム」に参加し、水口洋先生と出会い、この本に出会いました。

『陽だまりの窓辺から』の著者の水口洋先生は、現在、東京都にある玉川聖学院というキリスト教に基づく中高一貫女子校の校長先生をしておられます。この本は、4月の始まりの季節から3月の別れの季節まで、一年を通しての生徒の変化、生徒と教師の関係の変化、そして教師の役割について書かれています。先生は本書の中で、「人間は人との関係の中で学び合い、成長していく。そのために教師がすべきことは、子どもたちの心の一番深いところにある『良さに向かっていく心』を引き出すための努力と環境を整えること」だと書かれています。この本を初めて読んだ時、何て温かい本なのだろうと感じました。先生が一人ひとりの生徒のことを想って書かれたことが、真っ直ぐに伝わってきました。そして、自分自身の中高での生活のことを思い返し、私も陽だまりの中にいたのだと、その時実感しました。

4月から、夢だった教員としての道を歩み始めました。まだまだ自分の力不足を実感させられる毎日です。実際に子どもたちを目の前にして、現実は上手くいかないものだと思ってしまう時もあります。それでもやはり、私も子どもたちに「陽だまりの空間」を感じてもらいたい。そんな関係作りをしていきたい。この本を読むたびに、その原点に立ち返っています。

編集後記

この正月に、もう2児の母親になる、ある卒業生から年賀状が届いた。「昨年、近所の教会へ行き始めて、突然目からウロコがおちるように、神様のことがわかりました。幼稚園から大学、職場でもずっと聖書のお話を聞いてきたのに、今頃心がひらかれるなんて本当に不思議です…」撒かれた種は神様の手で実を結ぶことでしょう。3月に巣立っていく卒業生も、いつかどこかでその実をきっと結ぶことを信じて、送り出します。

中等部教諭　橋本 都美子

Wesley Hall News　第105号
2011年3月1日発行
発行　青山学院宗教センター　学院宗教部長　嶋田順好
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL.03-3409-6537（ダイヤルイン）
URL.http://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html
E-mail.agcac@jm.aoyama.ac.jp
編集　ウェスレー・ホール・ニュース編集委員会
印刷　株式会社 万全社

寒い冬のときを終えて、暖かい春を迎えました。日差しも日ごとに延び、足取りが軽くなるのを感じます。間もなく桜の開花の季節です。私たち日本では春の喜びは桜の開花と共に、そして満開の桜を見て一気に盛り上がります。この時季、世界のキリスト教国ではイースターを迎えます。イースターはイエス・キリストの復活を祝う祭で、イースターと共に春の喜びが一気に溢れ出ます。

イースターはクリスマスと違って変動祝日です。毎年、春分後の満月直後の日曜日がイースターの日で、今年は遅いイースター、4月24日になります。日本ではクリスマスの日を12月25日と知っていても、イースターの日を知っている人はほとんどいませんが、実はキリスト教の歴史ではイースターの方が早く祝われていたのです。それだけ大切な、意味ある祝日なのです。

説教　イースターを迎えて

マルコによる福音書　16章1節～18節　使徒言行録　2章14節～28節

坂上 三男　高等部宗教主任

主イエスの生涯

クリスマスがイエス・キリストの誕生日であることは誰でも知っていますが、そのキリストの生涯がどのような生涯であったかを考える人は余りいません。実は、イエス・キリストの生涯は決して晴れやかな、また恵まれた生涯ではなく、この世においては最も低い身分で、自己本位の愛ではなく、他者に尽くす本当の愛、神さまの愛を説き、その言葉通りに人々に尽くし、最後は十字架刑で殺された生涯でありました。イエス・キリストは当時の律法、しきたりに囚われていた指導者たちとは違い、律法を厳守できない弱い立場の人々や罪人と言われて差別されていた人たちに、神の愛を説いて救いの手を差し伸べました。

このキリストの行為は、しきたりを第一としていた指導者階級、祭司長や律法学者の反感を買うことになりました。また主イエスは民衆から慕われ、支持を受けたので、彼らはイエスにねたみを持ち、何とかイエスを抹殺したいと考えました。そこで、侵略者ローマ帝国総督の力を借り、民衆を巻き込んでイエスを極刑の十字架刑にしてしまったのです。

主イエスの復活

普通ならば、殺された時点でその人の生涯は終わります。しかし、主イエスの場合は違っていました。ここから新しく始まったのです。聖書の証言によると、主イエスが預言されていたように3日目に復活されたのです。復活した主イエスはその後、弟子たちや多くの人の前に現れたのです。主の復活を聞いた弟子たちは、最初誰も信じませんでした。しかし、復活した主イエスに実際に出会って、弟子たちは初めて信じるようになりました。

彼らは一転して喜びに溢れると共に、それまでの自分たちの不信仰を悔い改めました。また、主の復活を通して神様の全能の力を知ると共に、死は最後のことではなく、その先に復活があることを本当に知りました。更に、主イエスは人々の罪の贖いとして十字架による犠牲の死を遂げて下さったことを知りました。

イースターの始まり

主イエスの十字架の死、また復活の意味を知った弟子たちはその後、イエス・キリストの復活の証人として、本気になって伝道活動を始めました。今度は迫害を恐れる弟子としてではなく、どんな困難、苦しみにも立ち向かう強い弟子として、十字架に付けられたイエスこそ真の神の子、キリスト（救い主）であると伝道しました。

使徒パウロは最初キリスト教迫害者でしたが、復活のキリストに出会い、回心してキリスト教徒になった人です。彼はペトロを筆頭とした弟子たちと共に伝道に励み、各地にキリスト教の教会を始めました。彼ら最初のキリスト教徒は、イエス・キリストの復活を記念して、復活した日曜日を礼拝日として守るようになりました。また、春にはキリストの復活を特別に覚えて礼拝を行いました。

復活を信じる信仰

キリスト教はイースターに始まる宗教とも言えます。イエス・キリストを通して復活を信じる宗教です。復活を信じることは、どんな時にも希望を持つことです。不可能と思われる時にも、全てが終わりと思われる死に際しても、天国での復活の希望を持ちます。従って死をそれほど恐れる必要はありません。神の愛があるからです。信じる人にとっては、これほど人生において強い支え、また確かな希望はありません。

復活の奇跡を信じることは、最初のうちは中々できないことだと思います。私も最初、信じることができませんでした。しかし教会に通う中に、世界を創造する神様の偉大な力、また神様の大きな愛を知らされ、主イエスの復活の奇跡も信じることが出来るようになりました。私たちは教会の礼拝を通じ、聖霊によって復活を信じる信仰へと導かれるのです。復活を信じることが出来たことは、私にとって人生最大の収穫、また宝物です。これなくして人生は虚しく、はかないものです。この宝物は全て信じる者に与えられる宝物です。間もなく復活祭を迎えます。復活祭を心から喜びたいと思います。

Special Issue : Graduation A New step

特集　卒業――新しい一歩

いろいろな事があった学園生活も、残りわずか。思い出と、希望――卒業に寄せる思いを、各部の方にききました。

喜びと感謝のうちに

五味 亜美
幼稚園　保護者会会長

入園間もないとある夜、「神様、幼稚園ありがとうございます」と、息子は初めて自ら祈り、大好きな大叔母が手術の日、「神様、どうか痛くしないで下さい」と通園途中に突然祈り、両親のいないフィリピンの子どもの話を礼拝で聞いて帰った夜には、ひとり隠れて泣く姿を見ました。毎年冬には、様々なお手伝いをし、時にはおやつをひとつ我慢して、一生懸命お小遣い（らしきもの）を貯め、クリスマス献金をしました。幼いなりに、自分なりに、毎日何かを感じとり、目に見えないものが育つ瞬間が、そこここにありました。

親子一緒に通う時間に先が見え始めると、つなぐ手をいつまでも離したくない気持ちになりましたが、それに勝る喜びのうちに、巣立ちの時を迎えることができました。様々なめぐりあいのなか、親子ともに育てられた3年間でした。息子が初めて触れる小さな社会が、この幼稚園であった事は、本当に幸せな事でした。

この3年間で出会った全てのものに、心からの感謝を述べたいと思います。ありがとうございました。

まもられて、あいされて

寺田 恵理子
幼稚園　保護者会副会長

「うまれるまえから　かみさまに　まもられてきたともだちの　たんじょうびです　おめでとう。
うまれてきょうまで　みんなから　あいされてきたともだちの　たんじょうびです　おめでとう。」（こどもさんびか116）、この讃美歌は幼稚園のお誕生日会で毎月子どもたちが歌う讃美歌です。

つい先日、この歌を親子で歌うことがあり、娘の幼稚園での3年間の成長に思いを巡らす機会がありました。

3年前、不安一杯で幼稚園の門をくぐった娘でしたが、幼稚園での様々な活動を通して、いつも神様や先生方に守られ、愛されていると心と身体で感じ、安心して幼稚園で毎日を過ごすようになりました。のびのびと幼稚園で過ごすうちに、信頼できる仲間を得、その仲間を愛し、仲間のために祈り、仲間の喜びを我が喜びと感じることもできるようになりました。

このような成長は娘に限らず、年長組の他の子どもたちも同様です。お誕生日会で歌うこの讃美歌を、今、子どもたちは実感を持って歌っていると思います。ここまでこども達の育ちを支え導いてくださった先生方、本当にありがとうございました。

扉は開かれ続ける

片岡 佑来子
女子短期大学　英文学科2年

私は入学前の大学生活に期待と不安を抱く私自身と約束したことがある。それは「やりたいと思ったことに蓋をしない」ということだ。私は人の目を気にする。人からの評価を気にする。しかしもともと感受性が強く、表現していくことが好きな私はいつしか自分を自分で縮こませていた。私は二年間の大学生活に自分からブレーキを踏むのではなく、新しい自分へ背中を押せる私であろうと決めた。

私は4月に聖歌隊へ入部した。入学礼拝の時に「地には平和」を楽しそうに歌っていた先輩をみて、ただ私もあそこで歌ってみたいと思った。また私は教会へ繋がった。私は15歳の時にキリスト教に対して信仰を持ったが、洗礼は受けておらず、教会から離れて生活を送っていた。どの教会に集うべきかわからずにいた私に宗教主任の吉岡先生は優しく手を差し伸べてくださった。こうして私の大学生活は、神様の存在を生活の中でより多く感じられるものとしてスタートした。

大学生活は悩む時間がたくさんある。実際、自分の決断に間違いがあったのではないかと不安になることも何度もあった。しかしその度に思い出すひとつの大きな力をくれる御言葉「恐れることはない。わたしはあなたと共にいる神。たじろぐな、わたしはあなたの神。勢いを与えてあなたを助けわたしの救いの右の手であなたを支える。」（イザヤ書41:10）があった。

神様はいつも私と共にいてくださり、私は迷った時いつも祈りをささげた。私の好きな歌で"君は愛されるため生まれた"というものがある。曲の中に「何のために生きるかでなく、何かするため生かされている」という歌詞があり、私はこの地で命を授かり、生かされ、私も何かするために生かされているのだと強く感じる。

そして大学一年次、私は洗礼を受けた。弱い私の心にも神様がいてくださる"本当の強さ"があることを知った。私はこの大学を「卒業」としてひとつ終わりのピリオドを打つ。しかしこの二年間で培ってきたもの、神様との新たな出逢いはこれから社会を歩んでいく私の糧となる。今「卒業」を「感謝」という言葉に変え、伝えたい。

初等部で見つけた宝物

北川 愛莉
初等部6年

初等部に入学したころの私は、弱虫で不安をかかえた、内気な子供でした。そんな私の心安らぐ場所といえば礼拝堂で、小澤先生の温もりある声を聞き、手を合わせてお祈りすると、不思議と不安がうすれて勇気があふれてきたものです。

また、担任の先生はいつも私を信じて多くのチャンスを与えて下さいました。困った時には親身になって相談に乗って下さいました。

そして、多くの友達にもめぐまれました。教室で読書ばかりしていた私を校庭に連れ出してくれた事、運動会のリレー選手に選ばれた時に私以上に喜んで直前まではげましてくれた事、みんな優しい良い仲間でした。これは、神様が私にそなえて下さった大きな恵みでした。

こうした神様の恵みに支えられ、初等部での生活が私の心を強くし、前向きに明るく、自分を信じて毎日を送れるようにしてくれました。この気持ちは何にも代えられない、私が初等部で見つけた宝物です。この宝物がいしずえとなり、神様のご計画のうちにある事を信じて、すべてを御手にゆだねつつ、新たに中等部の生活へと羽ばたいて行きたいと思います。

神様と共に

山村 健人
初等部6年

初等部の一日は、礼拝から始まる。

僕は、礼拝堂は心を落ち着かせ一人きりになる場所だと思う。なぜなら礼拝堂は、神様に心を向けて今日一日を守ってもらう祈り、そして感謝を捧げる場所だからだ。

毎日、当たり前のように行っている礼拝だが大切だと思う。

僕が神様という存在を知ったのはカトリックの幼稚園の時。この頃から神様を信じていた。

年長の時、母に「どこの学校に行きたい。」と聞かれた時は、「神様の学校」と答えたそうだ。神様を意識し始めたのは、多分この頃からだろう。

一年生から六年生まで毎朝欠かさずに、礼拝を行っている。神様に心を向けて、一人きりになるというのは、高学年になりやっと行えた事かもしれない。

初等部ではいつも、人のために働く喜びを持ちなさいと言われてきた。この事は決して簡単な事ではなかった。しかし礼拝で心を落ち着かせる事によって、今日一日人のために働きたいという前向きな気持ちになれるのだ。

これから僕は、卒業を迎える。初等部で学んだ、神様を思う気持ち、神様に心を向け、感謝し、一日の生活を始める礼拝を続け、人のために働く喜びを一生持ち続けて行きたい。

信仰によって励まされて

武林　慧
大学　国際政治経済学部4年

「それで、兄弟たち、わたしたちは、あらゆる困難と苦難に直面しながらも、あなたがたの信仰によって励まされました。あなたがたが主にしっかりと結ばれているなら、今、わたしたちは生きていると言えるからです。」（テサロニケの信徒への手紙一　3章7～8節）

浪人を決めこんで、大学を受ける気がなかった高校3年生の秋、青山学院大学の願書を手渡してくれた先生。先生の信仰と祈りによって、私は受験し、無事に、入学まで整えられた。3年のクリスマス、住む家を突然失って、茫然自失の私に「泊まっていいよ」と言ってくれる、大勢の信仰の友が与えられていた。最後の一年間の学費は、信仰によって献げてくださった方の奨学金により、支えられた。

この大学生活を最初から最後まで貫いていたもの、振り返るとそれは「私の信仰」ではなく、「あなたがたの信仰」によって生かされてきた私。「私の信仰」は何度も、神様を見失い、神様を疑ってきたけれど、神様はその私に毎日、大学礼拝を備えてくださり、宗教センターでの信仰の友との出会いを与え続けてくださった。宗教主任、教職員の方々の熱い祈りの姿に出会わせてくださり、「主は生きておられる」と教えられた。私はその度に、励まされ、疑っていた自分を見つめ、聖書を再び手に取り、信仰の道を、もう一度歩んでいこうと思う事ができた。

青山学院に脈々と流れる、創立以来の伝道スピリットと信仰の先輩たちの困難を耐えての奉仕、熱い祈りが育んできた雰囲気。私はその中で自らの信仰を見つめる機会を与えられたことを心から感謝している。共に神様を見上げる多くの方の信仰に励まされ、その「主にしっかりと結ばれている」姿で、不安定な私の信仰生活、大学生活全体が支えられ、「生きている」いや、むしろ「生かされている」という事実を何度も確認してきた日々だった。

社会へと出ていく私にはもう、不安はない。どんなに体が離れていても、青山学院で与えられた交わりと、イエス・キリストを通して、心は共に生きていけるから。

お互いにしっかりと主に結ばれて、励まされ、生かされていく。

感謝

依田 英子
高等部3年

高等部で過ごした3年間はあっという間に過ぎてしまい、卒業式ももうすぐです。

初等部から青山学院で過ごし、中等部、高等部といつも私の学校生活の中には水泳部の存在がありました。晴れの日も雨の日も0.1秒でも速く泳ぎたいと思い、キツイ練習に取り組んでいました。しかし高等部1年生の冬、故障が原因で選手を引退し、ずっと選手として過ごしてきた水泳部でマネージャーに転向しました。転向してから、泳ぎたいと思う事がなかったと言えば嘘になりますが、マネージャーという選手をサポートする身として水泳というスポーツに向きあうにつれ、水泳に対する思いや考えが変わり、ますます好きになることができた気がします。

水泳は個人スポーツですが、キツイ練習、緊張する試合、タイムが出なくて苦しい時、仲間がいるからこそ、自分は1人で頑張っているわけじゃない。そう思える絆を感じられるからこそ頑張ることができるのだと思います。私はいつもマネージャーとして選手に接する時、「隣人を自分のように愛しなさい」という聖書の言葉を思い出していました。相手がその瞬間、何を必要としているのか、"今"自分にできることは何なのか、もし自分だったらどうしてほしいだろう。そんな風に "他者の気持ちや思いに敏感に反応できる人になりたい" と思うようになりました。

この3年間、私は水泳という自分の好きな事に没頭することができ、泣いたり、笑ったり、辛かったり、色々な思いをしましたが、こんなに一意専心することができた高等部生活は本当に青春でした。卒業後の進路はまちまちですが、この絆はこれからもどこかでつながっていると思います。

このような環境を与えてくださった北川先生を始め、多くの先生方、個性豊かで自分をしっかり持っているHR301の皆、そして、楽しい時も辛い時もいつも一緒にいてくれた水泳部の仲間、皆と出会え、同じ環境で学べたことに感謝しています。

道――目指すべき人

門田 美貴
中等部3年

私は青山学院中等部に入学し、幼稚園を卒園して以来再びキリスト教にふれました。中等部では、幼稚園の時と同じく毎日の礼拝で聖書の言葉を聴き、先生方のお話でその理解を深めてきました。また、聖書の授業では、様々なキリスト教の知識を得るとともに、現代社会が抱えている問題をキリスト教の視点で見つめ直したりしました。

この3年間で、人は生まれながらに罪人であるということを知り、また、私を大きな困難に遭わせず、さらに今このような機会で用いてくださる神の存在と、その愛を感じるようになりました。

キリスト教を知り神の愛を知った者は、神の愛に応えるべきではないかと考えるようになり、昔読んだ「クリスマス・キャロル」を思い出しました。そして、あの三人のクリスマスの亡霊は、実は神からの使いではないかと思うようになりました。神は御元を離れたスクルージを憐れみ、赦し、再び御元に立ち返らせようとします。年老いてその御心を知ったスクルージは、今までとは違う人生を歩みたいと思い始めました。このクリスマスという神の愛の証である日の、神に対する「キャロル（讃美）」の物語だと思いました。

私たちはよく「悪」を行わないように生きようとします。これが一番無難で、何かを犠牲にする危険もないと思えるからです。しかし最近、私は進んで「善」を行うことが、より確かな神への愛の証となるのではないかと思います。スクルージが、弱い人々に財産を分けたのも、その愛に応えたいという思いからだったでしょう。どちらも大切なことに変わりありませんが、行い、という目に見えるものを通し、初めて人々が神の愛を感じることができるのだと思います。

本当に「貴い人」というのは、友もなく、弱く、貧しい人々と共にいる人であり、それはイエスが身をもって示されたのだと思います。その行いのために自らも迫害を受けようとも、自分本位の幸福を求めるのではなく、人の幸福の為に喜んで自らを犠牲にするのが、目指すべき人だと感じるようになりました。

この中等部生活で私は本当にいろいろなことを考えました。そして、自らの憤りや悲しみを制したこともありました。卒業という節目を迎えますが、中等部生活を振り返り、また高等部、さらにはずっと大人になった時までへもつなげられるような時としたいです。

new morning

new world

new journey

CHRISTIAN ACTIVITIES CENTER NEWS
宗教センターだより

高等部より

卒業礼拝
3/8火　00:00　青山学院講堂
説教　リーデイ.D.W.
（学院宣教師・理工学部准教授）

卒業式
3/10木　9:30　青山学院講堂

入学式
4/7木　10:00　青山学院講堂

イースター礼拝
4/28木　10:15　青山学院講堂
（宗教主任　坂上三男）

女子短大より

卒業礼拝
3/17木　13:30～14:30　青山学院講堂
説教　シェロ マイク（学院宣教師）

キリスト教学校教育同盟校推薦入学生歓迎会
4/1金　11:00～12:00　女子短期大学礼拝堂 他

始業礼拝
4/2土　10:00～11:00　青山学院講堂
説教　吉岡康子（宗教主任）

春の研修・親睦会
4/16土　女子短期大学礼拝堂 他

チャペルウィーク
5/16月－20金

（宗教活動委員　秋富創）

大学より

オーストラリア・クリスチャンファミリー・ホームステイ・プログラム
2/11金－3/5土

第二部聖歌隊　春の小さな演奏会～最終回（ファイナルコンサート）～
3/6日　15:30～　ガウチャー記念礼拝堂

フィリピン訪問プログラム
3/16水－25金

ワークキャンプ in フィリピン
3/16水－30水

卒業礼拝
3/26土　9:00～　ガウチャー記念礼拝堂

キリスト教推薦入学生オリエンテーション
4/2土　9:00～　ガウチャー記念礼拝堂他

キリスト教概論Ⅰ オリエンテーション
4/4月－6水　ウェスレー・チャペル

新入生歓迎礼拝
相模原4/11月－16土
ウェスレー・チャペル

チャペル・ウィーク
青山　5/23月－27金
相模原5/23月－28土

宗教センターグループ活動
いずれの集会も自由に参加できます。

聖書に親しむ会
わかりやすく、楽しく聖書が学べます。
（宗教主任担当）

キリスト教文化に親しむ会
文学、自然科学、社会問題、音楽などをキリスト教信仰とのかかわりにおいて語り合い、考え合います。
（宗教委員、クリスチャン教員と宗教主任担当）

本部より

教職員新学年度礼拝
4/8金　17:00～　ガウチャー記念礼拝堂

（宗教センター事務室　平野修一）